

一般財団法人 川崎新都心まちづくり財団
郊外地域社会研究調査

新百合ヶ丘における
芸術文化活動に関する研究

2020、2021年度研究報告

2022年9月9日

藤田直哉(日本映画大学)

武濤京子(昭和音楽大学)

【研究の背景と目的】

◆新百合ヶ丘（川崎市麻生区）

市民による芸術文化活動を起点として、大学や行政が一体となって「文化・芸術と絡み合った街づくり」を推し進めてきた「ユニークな事例」

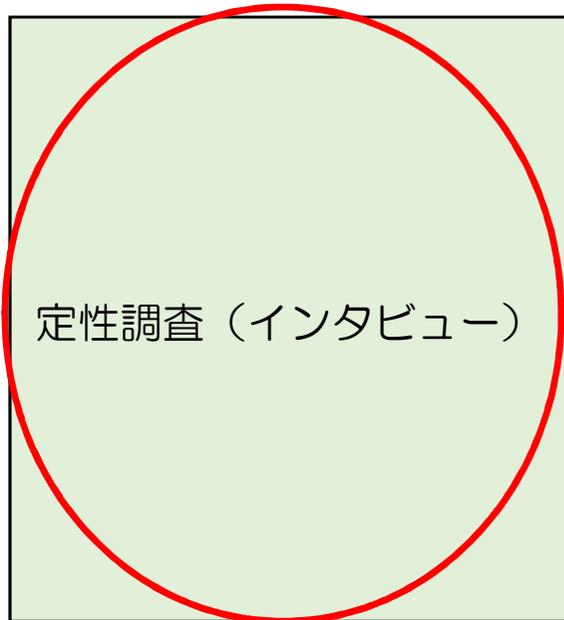
- 「芸術のまち構想」の経緯、狙い
- 芸術文化の実践活動の実態
- 文化・芸術活動への関心、評価
- 芸術文化活動の効果

新百合ヶ丘地域における文化・芸術活動が地域にどのような作用を及ぼしたのかを立体的に検証し、今後のあり方を考察する。

【研究の方法】

第一部

藤田（日本映画大学）
定性的な部分（事象事態の
複雑なつながり方を記述）



第二部

武濤（昭和音楽大学）
定量的な部分（既存データ
分析とアンケート調査）



おわりにー考察と提言

Two horizontal arrows connect the green box on the left and the blue box on the right. A vertical line descends from the bottom center of these two boxes, ending in an arrowhead pointing to the final box below.

【第一部】

新百合ヶ丘における芸術文化活動に関する定性研究(担当:藤田)

【研究目的】

新百合ヶ丘における文化芸術活動の実態を調査
特に、文化芸術のまちになった経緯・現状・課題・展望を明らかにする

【手法】

文化芸術関係者18名へのインタビューと資料調査による、質的調査

◆新百合ヶ丘・麻生の特質

文化・芸術関係者が昔から多く住んでいた
市民参加型のまちづくり
伝統的な農村が開発された新興住宅地であり、富裕層が多く住んでいる
音楽大学、映画大学の駅前への集積

→これらの特徴について重点的に聞き取り

◆研究結果、抄録

新百合ヶ丘が「文化・芸術のまち」になった経緯

プレ期（小田急線開通以前）

元々は谷戸地形の農村
江戸時代は幕府の直轄領
どんと焼きや芝居が行われていた
俳句が盛んであった
明治時代には自由民権運動が活発に

第一期（映像と文学の時代）

1927年～1960年代

1927年、小田急線開通
1931年、成城に東宝の写真科学研究所。以後、映画・映像の施設が多摩川近辺に出来て、映画映像関係者が住む。
1947年 河上徹太郎が片平に移住。
白州次郎・正子や、庄野潤三と交流。
1953年 川崎文化協会設立

⇒文化施設の集積・文化人の集住

・イギリス貴族が好んだような、郊外の落ち着いた環境を求めている。

第二期（地域文化の時代）

1960年代～1970年代

1961年 元中央公論社編集者・藤田親昌移住。人と人を「編集」する。民俗学的な興味で様々に取材。

『文化評論』を発行し、農村文化を推進。北條秀衛・梶亨らとも良く会い、まちづくりについて話し合う。

周囲の開発を見て危機感を抱いた中島豪一ら地元の住人達も組織化。「インディアン精神」を重視する。

市民サイドからのまちづくりを展開。失われていく伝統や生活と開発のジレンマの主題に悩む。

ウィリアム・モリス的な芸術観の普及。（自然環境・生活と結びついた芸術）

1967年 一楽照雄が「農住都市構想」を発表。柿生地域は農村住宅団地建設計画の推進地域に選定

第三期（「第一のまちびらき」時代）

1970年代～1980年代

開発を巡る動きが盛んに。

新旧住人を「つなぐ」文化が必要に

1970年 多摩区文化協会設立

1971年 東映生田スタジオ開業『仮面ライダー』誕生。小田急沿線は特撮の聖地に。

1974年 新百合ヶ丘駅開業

1977年 藤田は、小林直樹らと「川崎における新しい市民参加のあり方」

「緑の多摩のふるさと祭」の提案

1979年「芸術のまち構想シンポジウム」開催。

⇒新旧住人をつなぎ、伝統を大事にしつつ新しいものを探り、新しい地域アイデンティティを形成していくために文化芸術が機能していく。

第四期（麻生区誕生の時代） 1980年代～1995年頃

1980年代 「芸術と科学の回廊」構
想開始

1980年 細山郷土資料館開館

1982年 麻生区分区

1983年 あさお区民まつり開始

1984年 麻生区文化協会設立

1985年 麻生市民館が完成。市民が
多数参加。川崎市文化財団、麻生区美術
家協会設立。

1986年 麻生音楽祭開始。日本映画
学校移転。川崎新都心街づくり財団設立

1989年 昭和音楽芸術学院移転

1990年 「多摩田園芸術と科学の回
廊基本構想実現化調査－「アートと科学
の都市」基本構想調査－」（CDI）

1990年代初頭 バブル崩壊に伴い、
堤清二のセゾングループが新百合ヶ丘の
開発から撤退。

⇒民俗学的な性質を持つ作家（今村昌
平・岡本太郎）を招くことが多い。伝
統・自然を活かした文化芸術の発展への
期待か。

第五期（バブル崩壊の時代） 1995年頃～2007年頃

1991年 川崎市企画財政局企画室
「川崎市の新都心・新百合丘周辺地域
芸術のまち構想」発表
『芸術のまち構想』シンポジウム

1993年 「国際環境芸術シンポジ
ウム」、能楽鑑賞会、映画鑑賞会・講
演等

1995年 「KAWASAKIしんゆり
映画祭」開始、「芸術のまちづくりイ
ベント」が「しんゆり芸術フェスティ
バル」に改称

第六期（「第二のまちびらき」時代）2007年頃～

2000年 あさおランチタイムコンサート開始。禅寺丸柿保存会発足

2007年 「万福寺土地区画整理事業」施行。「新百合山手」まちびらき。川崎アートセンター開館。昭和音楽大学移転。kirara@アートしんゆり開始

2008年 「映像のまち・かわさき」推進フォーラム設立。アルテリッカ新ゆり美術展開始

2009年 アルテリッカしんゆり開始。文化庁の芸術のまちづくり事業に認定

2010年 特定非営利活動法人 しんゆり・芸術のまちづくり設立

2011年 日本映画大学設立

2015年 あさお芸術・文化交流カフェ開始

2018年 新百合ヶ丘エリアマネジメントコンソーシアム始動

◆まとめ

- 谷戸地形の文化的に豊かな農村
- 知識教育に熱心
- 豊かな自然環境を求めた文化人の集住
- 自然と民俗を大事にする藤田親昌の移住、組織化
- 乱開発への危機意識。住人主体のまちづくりへ
- モリス的な上品な住環境へ
- 川崎の「科学」「公害」との対比、自然との調和や「環境」への問いを芸術や文化が担ってきた

◆課題

分断

- 旧住人と新住人の文化の差
- 伝統の継承
- 新しいことを起こせない
- 若い世代が加わらない、若い世代向けの文化芸術が乏しい
- サブカルチャーやデジタル文化の導入

新興住宅地の弱点

- 墓や神事などの文化の弱さ
- 子供たちが住み続けるか
- 土地への責任意識、郷土愛がない
- 少子高齢化

参加・包摂

- 外国人や障害者などの包摂
- 子育て世代、ママたちへの支援、触れ合う機会のなさ
- 学生・若者の活動の乏しさ

創造性

- お金と「表現の自由」の問題
- クリーンすぎる環境が創造性に良いのか
- 子供たちが自然に触れたり遊んだりできていない
- プロと市民の関係をどうするか

文化芸術施設

- シンボルがない
- 建物が芸術的悦びを喚起しない
- 駅を文化芸術のまちに相応しく

情報発信

- 若い人や新しい住人に届いているのか？
- 街のブランド化
- 「人」を発信する
- アクターや方向性の集約
- 全国や全世界に向けてプロモーションするべきか？

◆展望

- デジタル田園都市になる
- 文化芸術でまちの魅力を作り、空洞化を防ぐ
- 特撮の聖地にして美術館を作り世界中から人を呼ぶ
- デジタルミュージアムを作る
- SDGsを推進する農住芸術都市
- 芸術大学を集積する
- 家族や雇用などの転換期に対応するまち
- 子育てをしやすいまち
- 駅前に総合的な文化施設を建てる
- 美術館を作る。もっとまちで美術を展開する
- 駅舎はギーカーみたいなものにする
- 交流できるような図書館を作る
- 芸術家の卵を住ませて育てる
- 国際学生映画祭をやる
- 自分でものを考え、既存の枠組みを疑える人を育てる
- 世界に通じる表現者を育てる
- 清潔さだけでなく猥雑さを取り戻す
- 伝統的な死生観を再導入する
- 開かれたクリエイティブのまちにする
- 伝統的な文化と新しい文化を止揚する

【第二部】

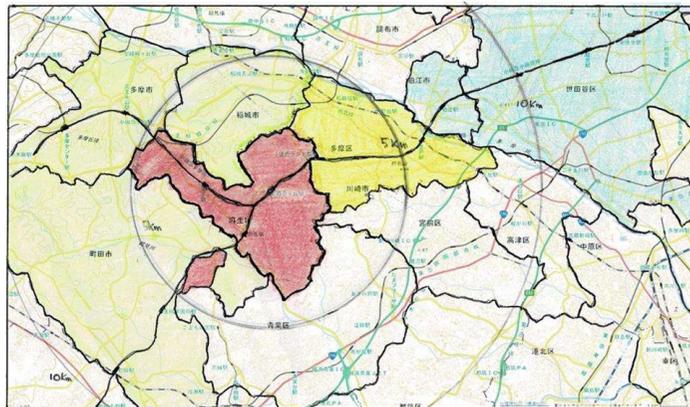
新百合ヶ丘における芸術文化活動に関する定量研究(担当:武濤)

【研究目的】新百合ヶ丘における文化芸術活動の実態を調査
客観的データに基づき、活動の実態、特徴を分析し、他地域
との違い、課題や展望を明らかにする

【手法】インターネットアンケート調査を中心とした定量調査

【調査対象地域とゾーニング】

分析対象区域である麻生区（サンプル数313）、比較対象地域として新百合ヶ丘
中心に半径10km圏に属する小田急線（本線および多摩線）沿線6市区町村、す
なわち隣接する多摩区（106）、分断要素の大きい多摩川を境とした多摩川東部
（世田谷区、狛江市：合計158）と多摩川西部（町田市、稲城市、多摩市：合計
158）の4ゾーン、全体サンプルの合計は735となっている。



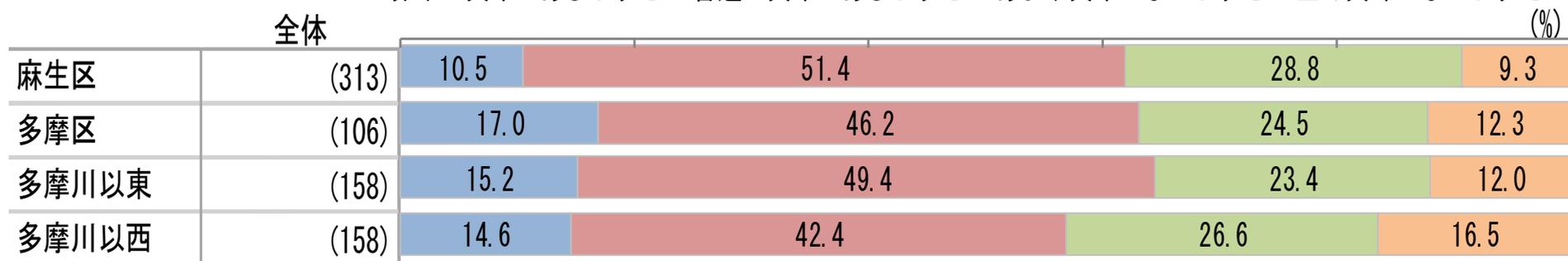
役割	ゾーン名	対象市区
分析ゾーン	1.麻生区	川崎市麻生区
	2.多摩区	川崎市多摩区
比較対象ゾーン	3.多摩川以东	東京都世田谷区、東京都狛江市
	4.多摩川以西	東京都町田市、東京都稲城市、東京都多摩市

【芸術・文化活動への関心】

◆芸術文化全般への関心

4ゾーン総じて、芸術文化への関心が高い

■非常に興味があるほうだ ■普通に興味があるほうだ ■あまり興味がないほうだ ■全く興味がないほうだ



◆関心のある芸術文化分野（複数回答）

麻生区では、音楽（71.6%）と演劇・舞台（28.8%）の値は他の3ゾーンに比べて高く、美術・工芸（40.9%）の数値が他の3ゾーンより低い。

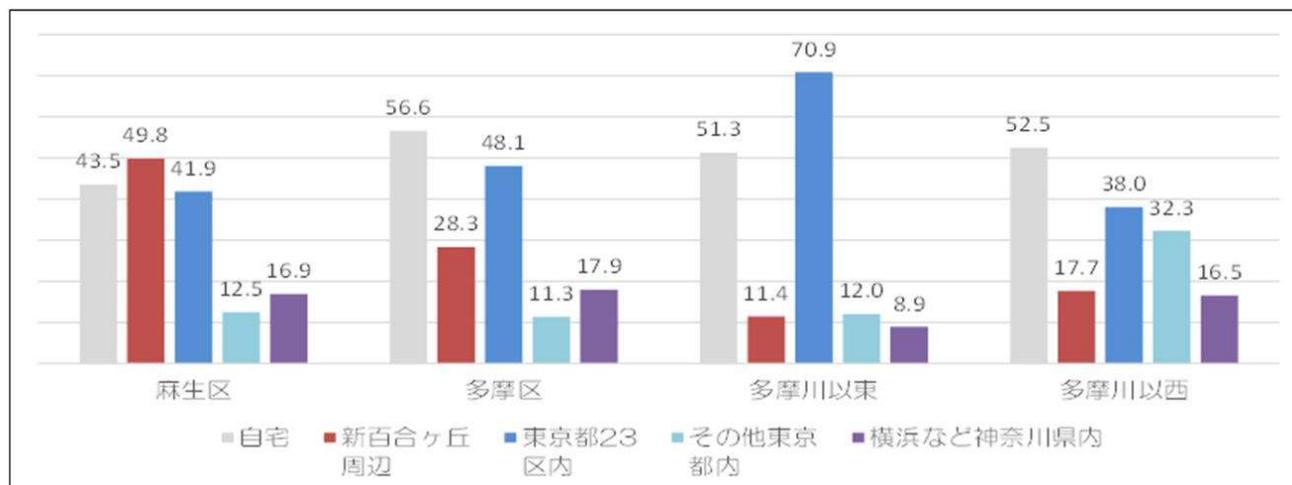
	全体	音楽	映画	文芸	演劇・舞踊	演芸・芸能	美術・工芸	特になし
麻生区	(313)	224 71.6	212 67.7	77 24.6	90 28.8	84 26.8	128 40.9	53 16.9
多摩区	(106)	72 67.9	73 68.9	29 27.4	25 23.6	29 27.4	49 46.2	19 17.9
多摩川以東	(158)	100 63.3	99 62.7	47 29.7	38 24.1	38 24.1	73 46.2	31 19.6
多摩川以西	(158)	104 65.8	106 67.1	32 20.3	43 27.2	38 24.1	72 45.6	36 22.8

【鑑賞したことのある芸術文化活動の実態】

◆芸術文化鑑賞活動の4ゾーン比較（2019年1-12月、複数回答）



「音楽」と「映画」の分野では麻生区が1位で多摩区が2位であるのに対して、多摩川以东は「美術・工芸」と「文芸」、「演芸・芸能」、「演劇・舞踏」の4分野で1位である。



代表的な鑑賞場所を4ゾーンで比較すると、麻生区民は、東京23区内より、新百合ヶ丘周辺で鑑賞している割合が高い。他ゾーンの住民も、一定の割合で新百合ヶ丘で鑑賞していることがわかる。

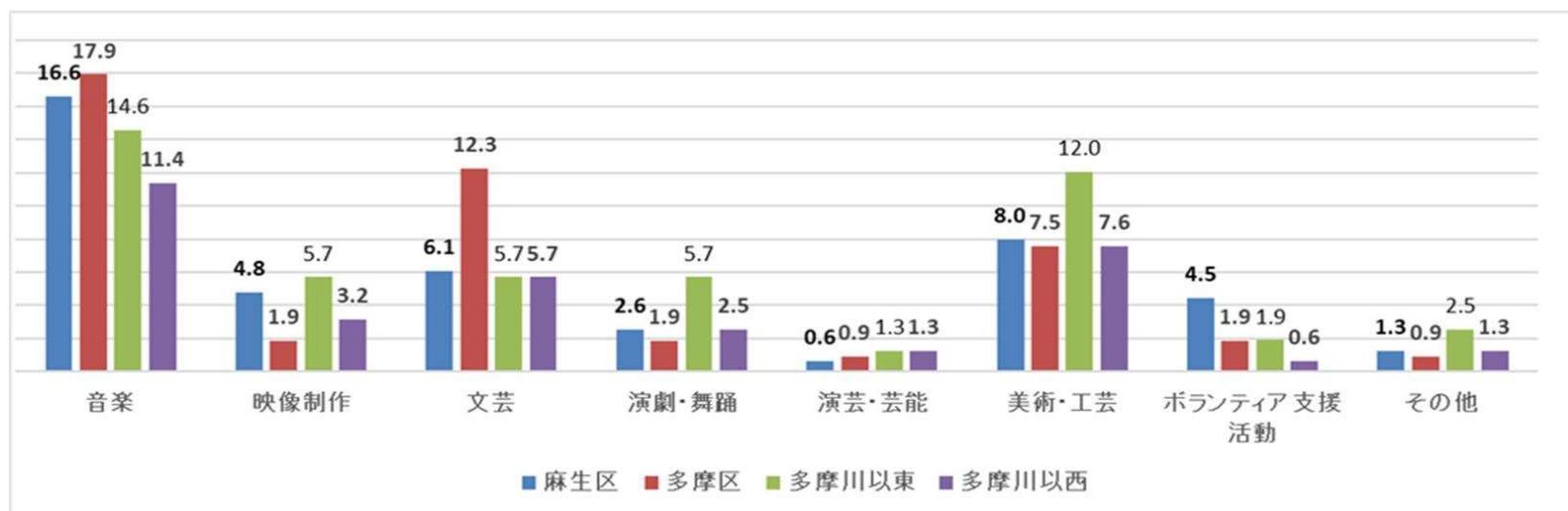
【日頃実践している芸術文化活動の実態】

◆芸術文化実践活動の4ゾーン比較（2019年1-12月、複数回答）

麻生区は1位「音楽」16.6%、2位「美術・工芸」8.0%、3位「文芸」6.1%、4位「映像制作」4.8%である。「ボランティア・支援活動」は麻生区が4.5%と飛びぬけて高い値となっている。

ゾーン名	サンプル数	音楽	映像制作	文芸	演劇・舞踊	演芸・芸能	美術・工芸	ボランティア・支援活動	その他	無回答・日頃実践なし
麻生区	(313)	16.6	4.8	6.1	2.6	0.6	8.0	4.5	1.3	71.2
多摩区	(106)	17.9	1.9	12.3	1.9	0.9	7.5	1.9	0.9	67.0
多摩川以東	(158)	14.6	5.7	5.7	5.7	1.3	12.0	1.9	2.5	65.8
多摩川以西	(158)	11.4	3.2	5.7	2.5	1.3	7.6	0.6	1.3	77.8

1位
 2位
 3位



【新百合ヶ丘の芸術文化活動に対する認知・経験状況】

◆新百合ヶ丘のイメージの麻生区世代別比較（複数回答）

「音楽文化の盛んな街」というイメージを持っている割合（ヤング層が30.5%、ミドル層が33.3%、シルバー層が26.0%）は世代間でそれほど差がないが、「映画文化の盛んな街」や「総合的に芸術文化が盛んな街」については、世代が高くなるほど強いイメージを持っており、世代間の差が大きい



麻生区全体	(313)	69.0	35.5	32.9	30.4	21.1	20.1	3.2	3.2	8.0
麻生区ヤング（男女）	(59)	57.6	15.3	20.3	30.5	16.9	18.6	0.0	6.8	10.2
麻生区ミドル（男女）	(150)	73.3	37.3	30.0	33.3	22.7	20.0	6.0	1.3	8.0
麻生区シルバー（男女）	(104)	69.2	44.2	44.2	26.0	21.2	21.2	1.0	3.8	6.7

【新百合ヶ丘の芸術文化活動に対する認知・経験状況】

◆麻生区世代別の芸術文化団体の認知度（複数回答）

全体的な傾向として、シルバー層では各団体の認知度が高く、ヤング層では低い。しかし、「NPO法人しんゆり・芸術のまちづくり」と「劇団わが町」ではミドル層の認知度が他の2つの層より高く、「NPO法人KAWASAKIアーツ」では、ヤング層の認知度が16.9%と最も高くなっている。

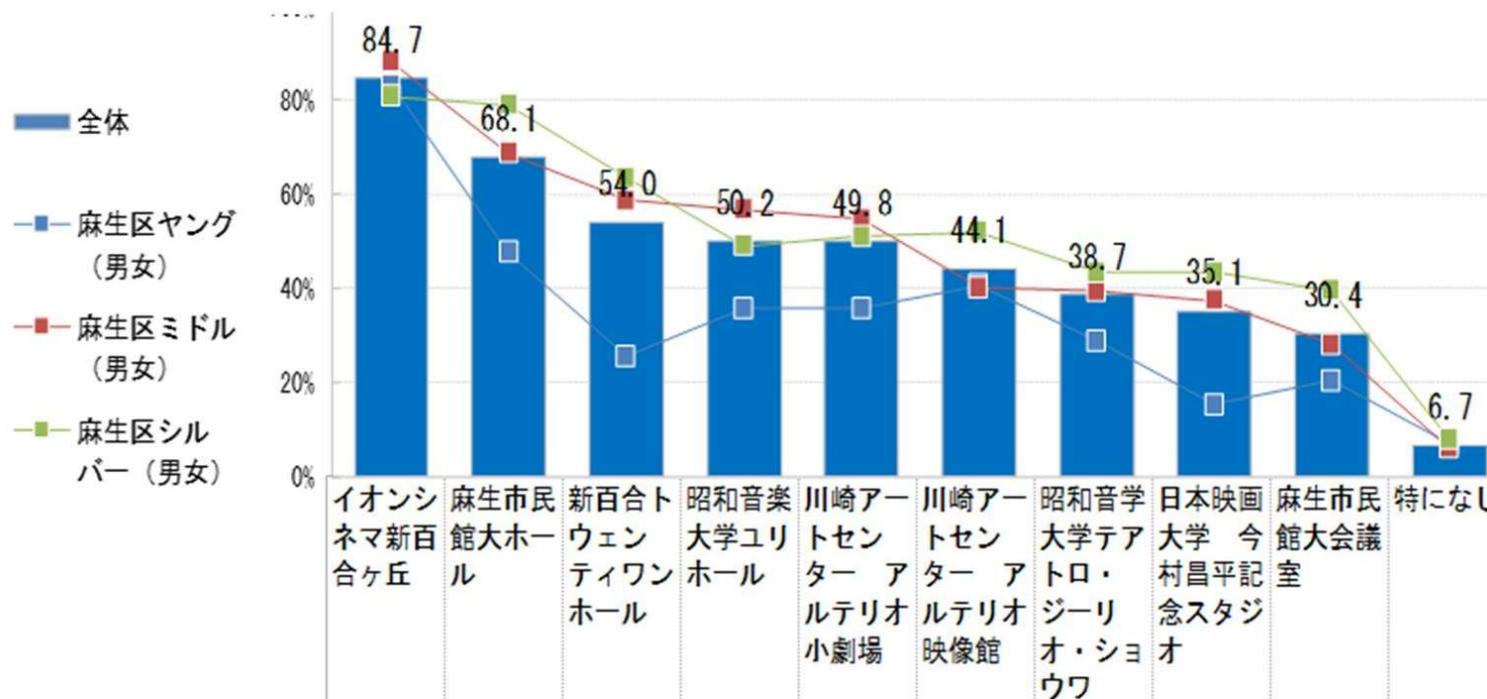


麻生区全体	(313)	91.7	84.3	31.6	29.4	25.2	15.3	8.6	8.3	5.1	6.7
麻生区ヤング (男女)	(59)	79.7	59.3	8.5	25.4	23.7	5.1	5.1	16.9	3.4	16.9
麻生区ミドル (男女)	(150)	92.7	86.7	36.0	32.7	22.7	17.3	8.0	9.3	7.3	6.7
麻生区シルバー (男女)	(104)	97.1	95.2	38.5	26.9	29.8	18.3	11.5	1.9	2.9	1.0

【新百合ヶ丘の芸術文化活動に対する認知・経験状況】

◆麻生区世代別の芸術文化施設の認知度（複数回答）

イオンシネマ（すべての層で80%以上）を除くと、ほぼすべての施設でヤング層の認知度がミドル層、シルバー層より低く、麻生市民館や新百合トウェンティワンホールでは、ヤング層と他の層との認知度の差が大きい。ユリホール、アートセンターアルテリオ小劇場では、わずかではあるがミドル層の認知度がシルバー層、ヤング層を上回っている。

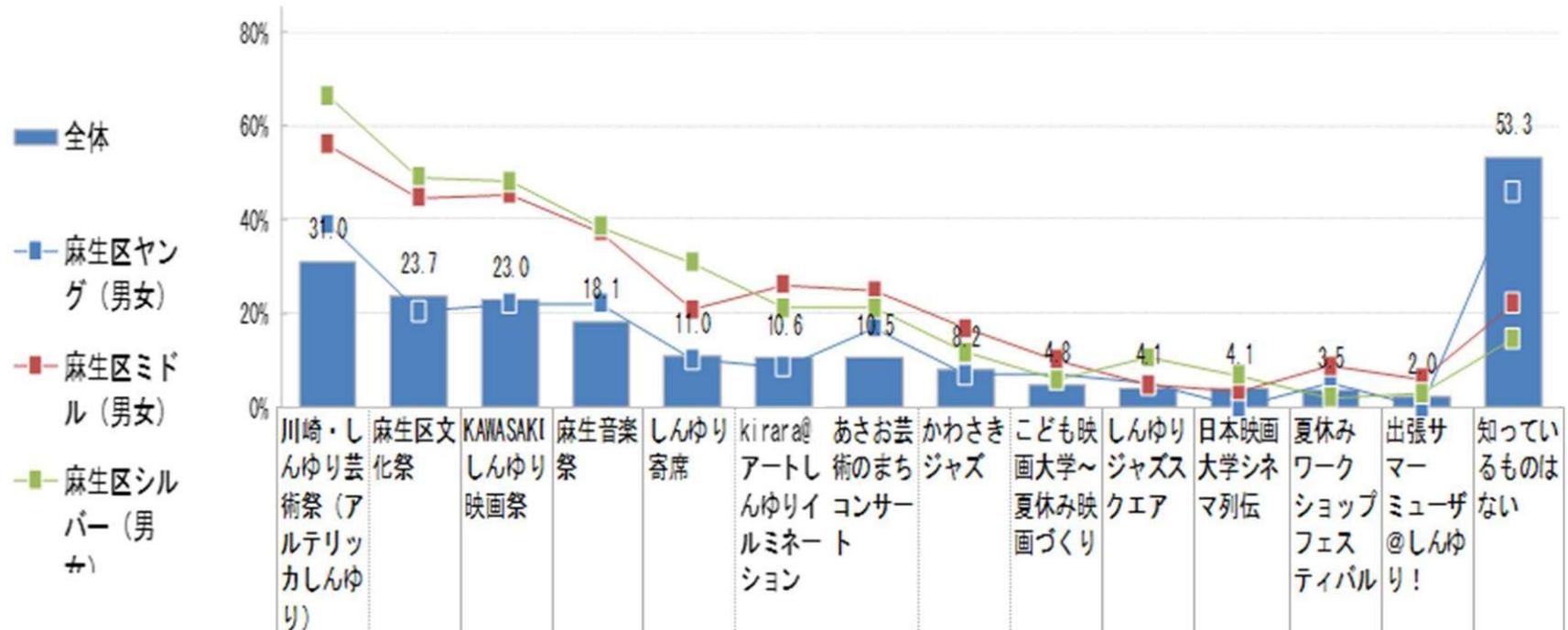


麻生区全体	(313)	84.7	68.1	54.0	50.2	49.8	44.1	38.7	35.1	30.4	6.7
麻生区ヤング (男女)	(59)	83.1	47.5	25.4	35.6	35.6	40.7	28.8	15.3	20.3	6.8
麻生区ミドル (男女)	(150)	88.0	68.7	58.7	56.7	54.7	40.0	39.3	37.3	28.0	6.0
麻生区シルバー (男女)	(104)	80.8	78.8	63.5	49.0	51.0	51.9	43.3	43.3	39.4	7.7

【新百合ヶ丘の芸術文化活動に対する認知・経験状況】

◆麻生区世代別の芸術文化イベントの認知度（複数回答）

ミドル層とシルバー層の各イベントの認知度に比べて、どのイベントもヤング層の認知度が著しく低く、「しんゆりジャズスクエア」のみヤング層（5.1%）がミドル層（4.7%）を上回っている。



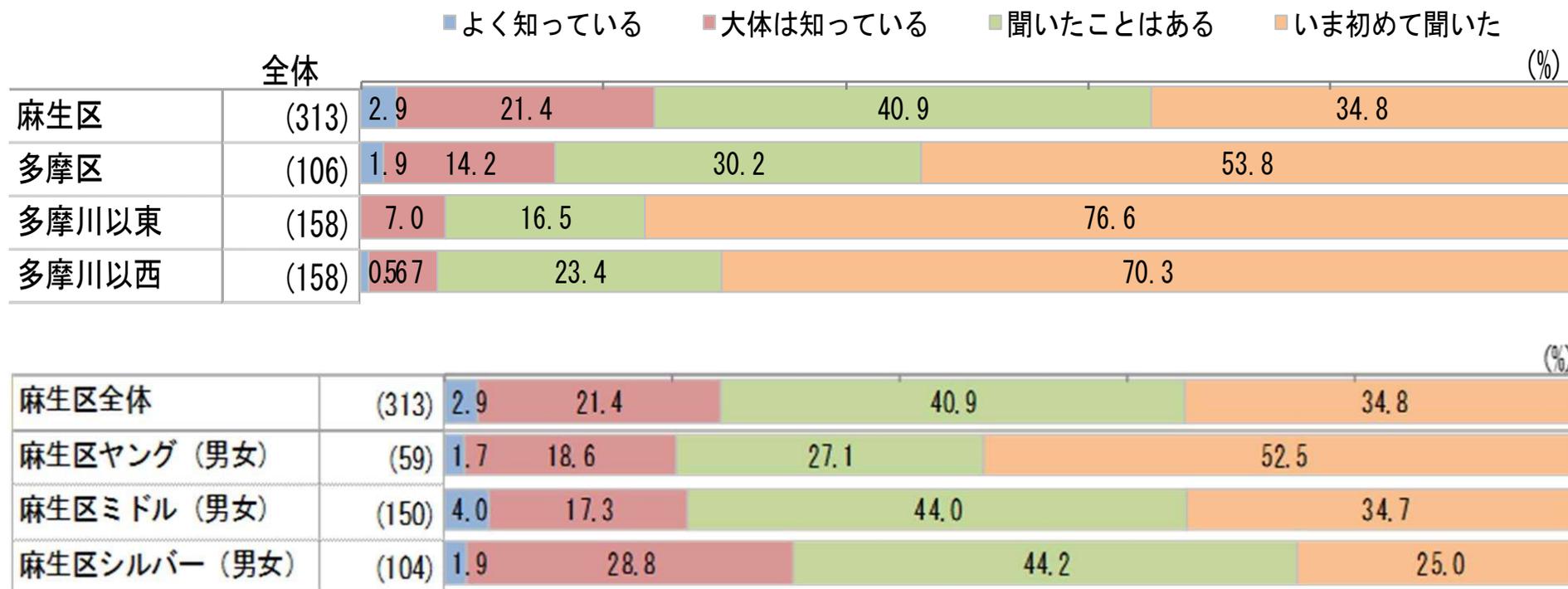
4ゾーン全体	(735)	31.0	23.7	23.0	18.1	11.0	10.6	10.5	8.2	4.8	4.1	4.1	3.5	2.0	53.3
麻生区	(313)	56.2	41.5	41.9	34.8	22.0	21.1	22.0	13.1	8.0	6.7	3.8	5.8	3.8	24.0
麻生区ヤング (男女)	(59)	39.0	20.3	22.0	22.0	10.2	8.5	16.9	6.8	6.8	5.1	0.0	5.1	0.0	45.8
麻生区ミドル (男女)	(150)	56.0	44.7	45.3	37.3	20.7	26.0	24.7	16.7	10.0	4.7	3.3	8.7	6.0	22.0
麻生区シルバー (男女)	(104)	66.3	49.0	48.1	38.5	30.8	21.2	21.2	11.5	5.8	10.6	6.7	1.9	2.9	14.4

【しんゆり・芸術のまち構想について】

新百合ヶ丘は恵まれた環境を求めて多くの作家や文化人たちが集まって住んでおり、市民・行政・大学とが協力して芸術を活かしたまちを作り上げてきました。

それを受けて、1991年には川崎市が、文化を活用したまちづくりを行う「芸術のまち構想」を発表し、アートセンターなどの施設が作られ、市民と行政が共に芸術のまちづくりを進めています。

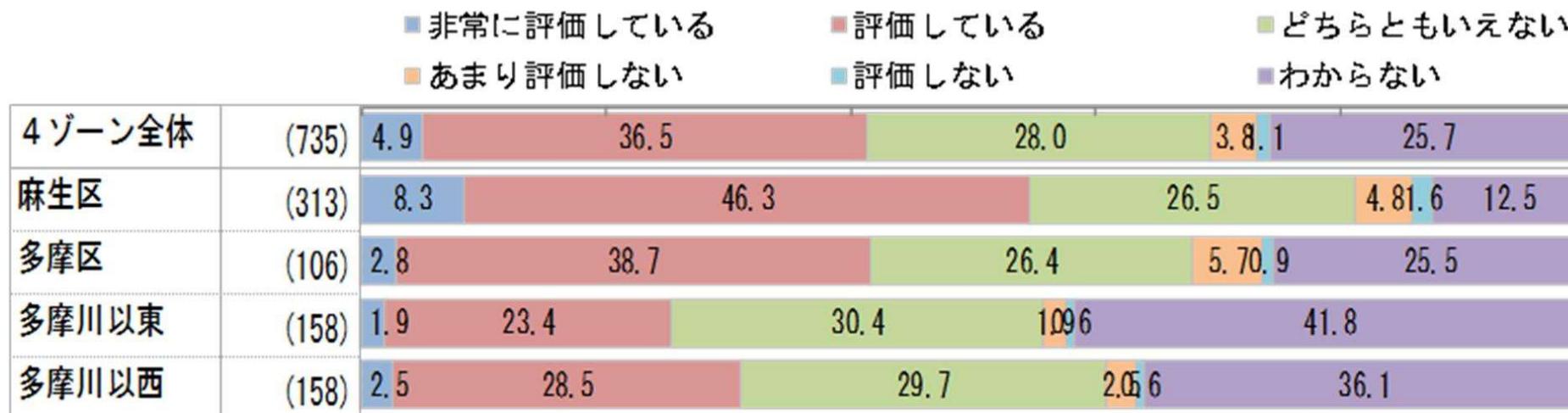
◆構想の認知度（4ゾーン、麻生区世代別）



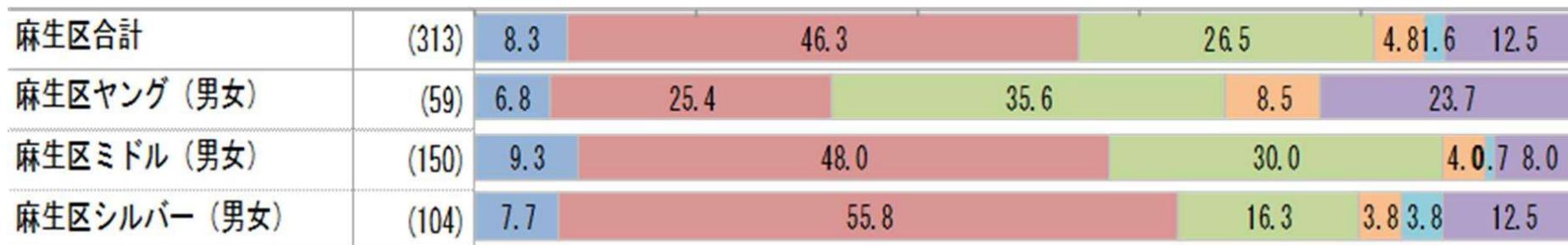
【新百合ヶ丘の芸術・文化活動の評価】

◆新百合ヶ丘の芸術文化活動の評価（4ゾーン、麻生区世代別）

「非常に評価している」と「評価している」の合計を見ると、麻生区54.6%、多摩区41.5%、多摩川以西31.0%、多摩川以東25.3%の順となっている。多摩区民の評価が高いのは、この2つの区はもともと同じ区で、歴史や文化活動が重なり合う部分が多いからであると考えられる。



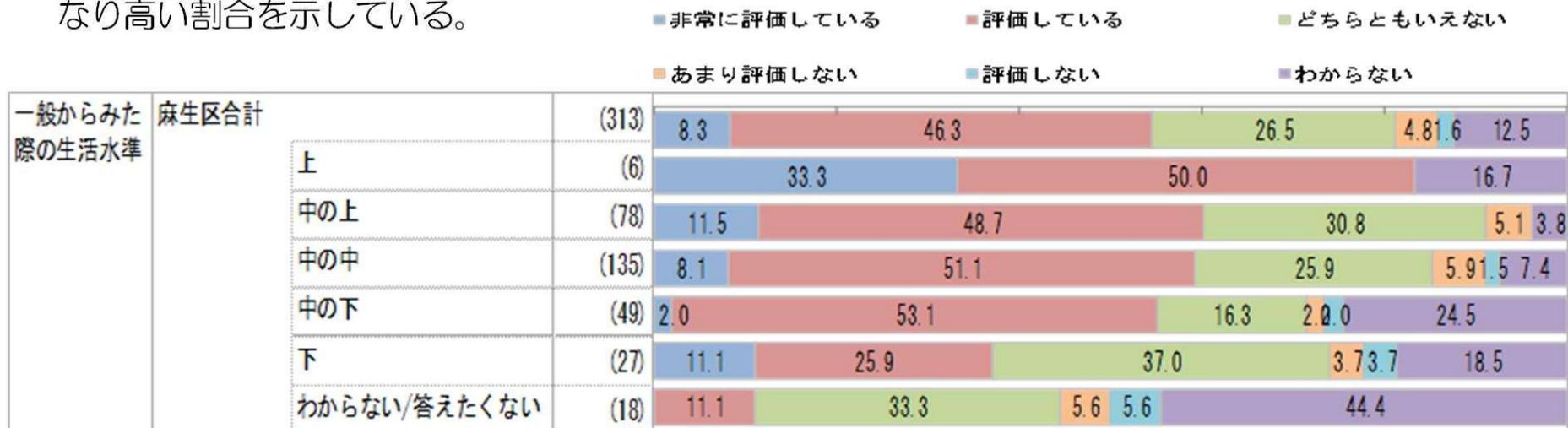
「非常に評価している」「評価している」の合計を比較すると、ヤング層は32.2%で、他の2つの世代との差が大きい。また、「わからない」という回答がヤング層では23.7%に達しており、他の2層よりかなり多くなっている。この結果からも、ヤング層に内容がアピールできていないことが推測される。



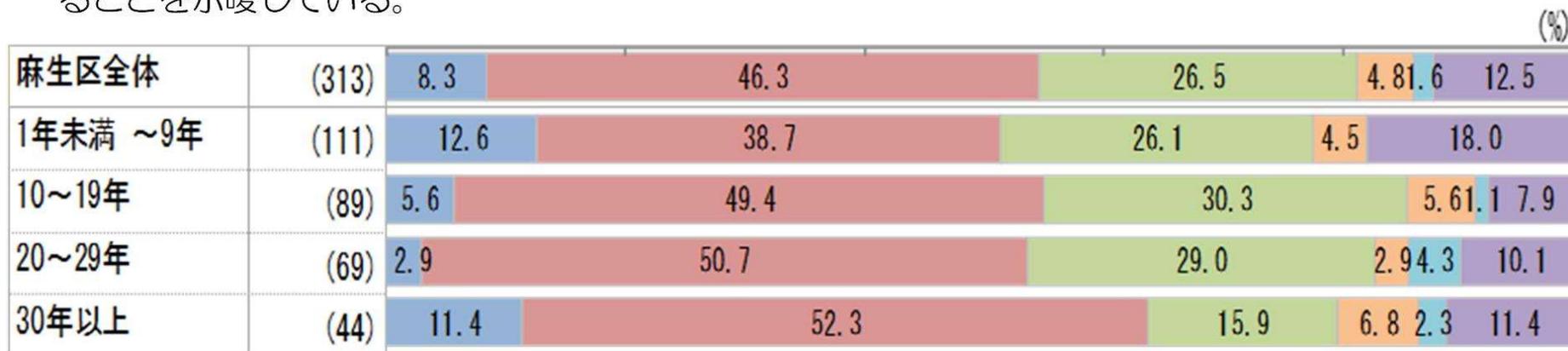
【新百合ヶ丘の芸術・文化活動の評価】

◆新百合ヶ丘の芸術文化活動の評価（麻生区生活水準別、居住年数別）

「生活水準が高い」と感じているセグメントほど、新百合ヶ丘の芸術文化活動への評価が高いという傾向が明らかであった。また、「非常に評価している」という回答に注目すると「下」の層で11.1%と、かなり高い割合を示している。



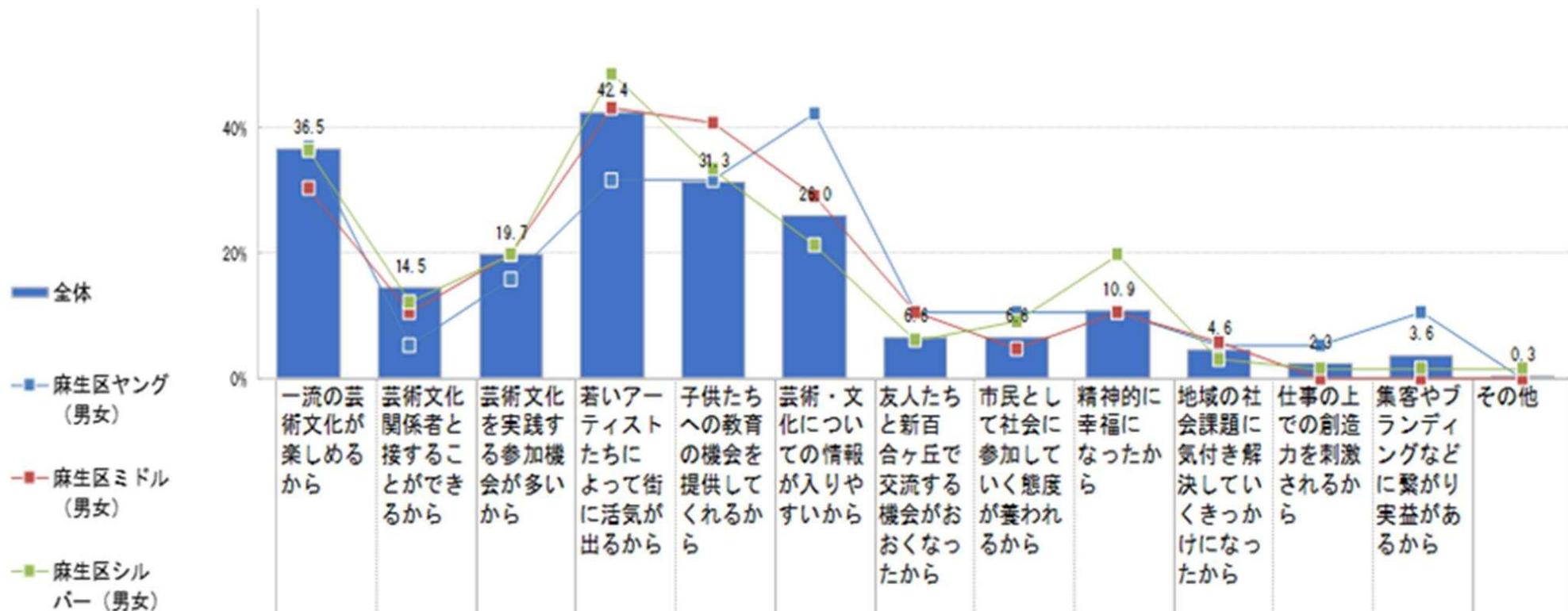
「非常に評価している」と「評価している」合計の比較では「30年以上」の層以外は似た数値である。一方で、「非常に評価している」のみに着目すると、「1年未満～9年」の層が最も高く（12.6%）、新しくこの地域に移り住んだ層には、新百合ヶ丘の芸術文化活動を高く評価している人たちが一定数存在することを示唆している。



【新百合ヶ丘の芸術・文化活動の評価】

◆新百合ヶ丘の芸術文化活動を評価する理由（麻生区年代別、複数回答）

芸術文化活動を評価する理由として、シルバー層では「精神的に幸福になった」19.7%、ミドル層では「子供たちへの教育の機会を提供してくれるから」40.7%、ヤング層では「芸術文化についての情報が入りやすいから」42.1%という回答が、他の層との差が大きい。

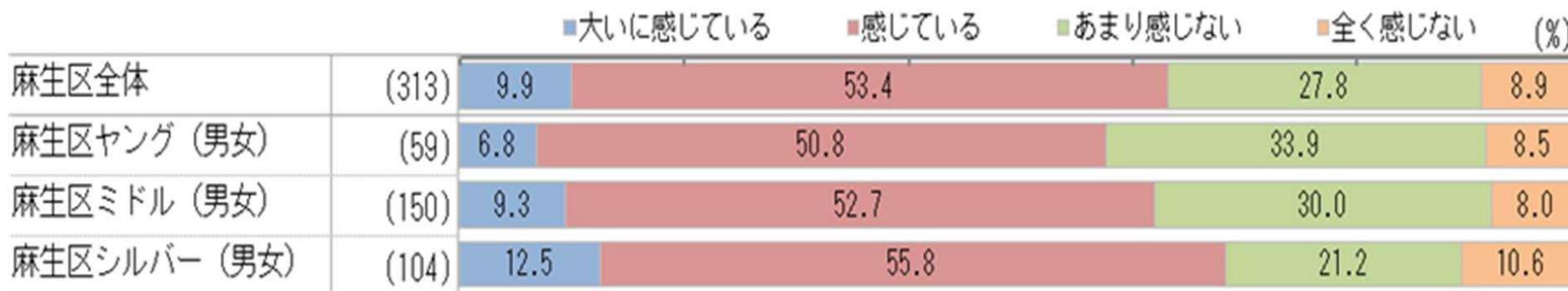


麻生区合計	(171)	33.3	10.5	19.3	43.9	36.8	27.5	8.8	7.0	14.0	4.7	1.2	1.8	0.6
麻生区ヤング (男女)	(19)	36.8	5.3	15.8	31.6	31.6	42.1	10.5	10.5	10.5	5.3	5.3	10.5	0.0
麻生区ミドル (男女)	(86)	30.2	10.5	19.8	43.0	40.7	29.1	10.5	4.7	10.5	5.8	0.0	0.0	0.0
麻生区シルバー (男女)	(66)	36.4	12.1	19.7	48.5	33.3	21.2	6.1	9.1	19.7	3.0	1.5	1.5	1.5

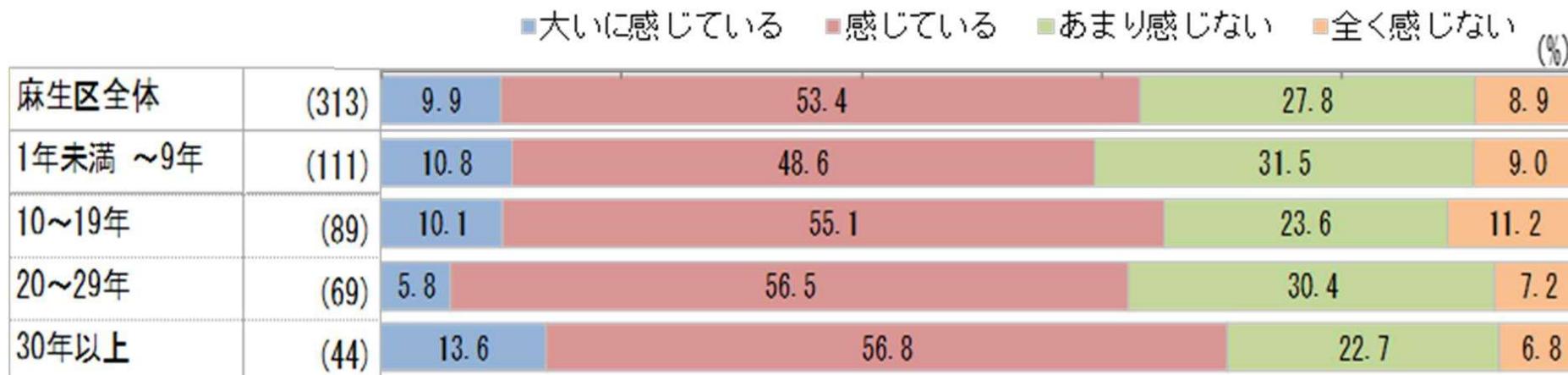
【新百合ヶ丘の芸術・文化活動の評価】

◆新百合ヶ丘への愛着や誇りの比較（麻生区世代別、居住年数別）

芸術文化活動によって新百合ヶ丘に愛着や誇りを感じている割合は、シルバー層（68.3%）、ミドル層（62.0%）、ヤング層（57.6%）の順である。一方で、「全く感じない」という否定的な回答はシルバー層が最も多く（10.6%）となっている。



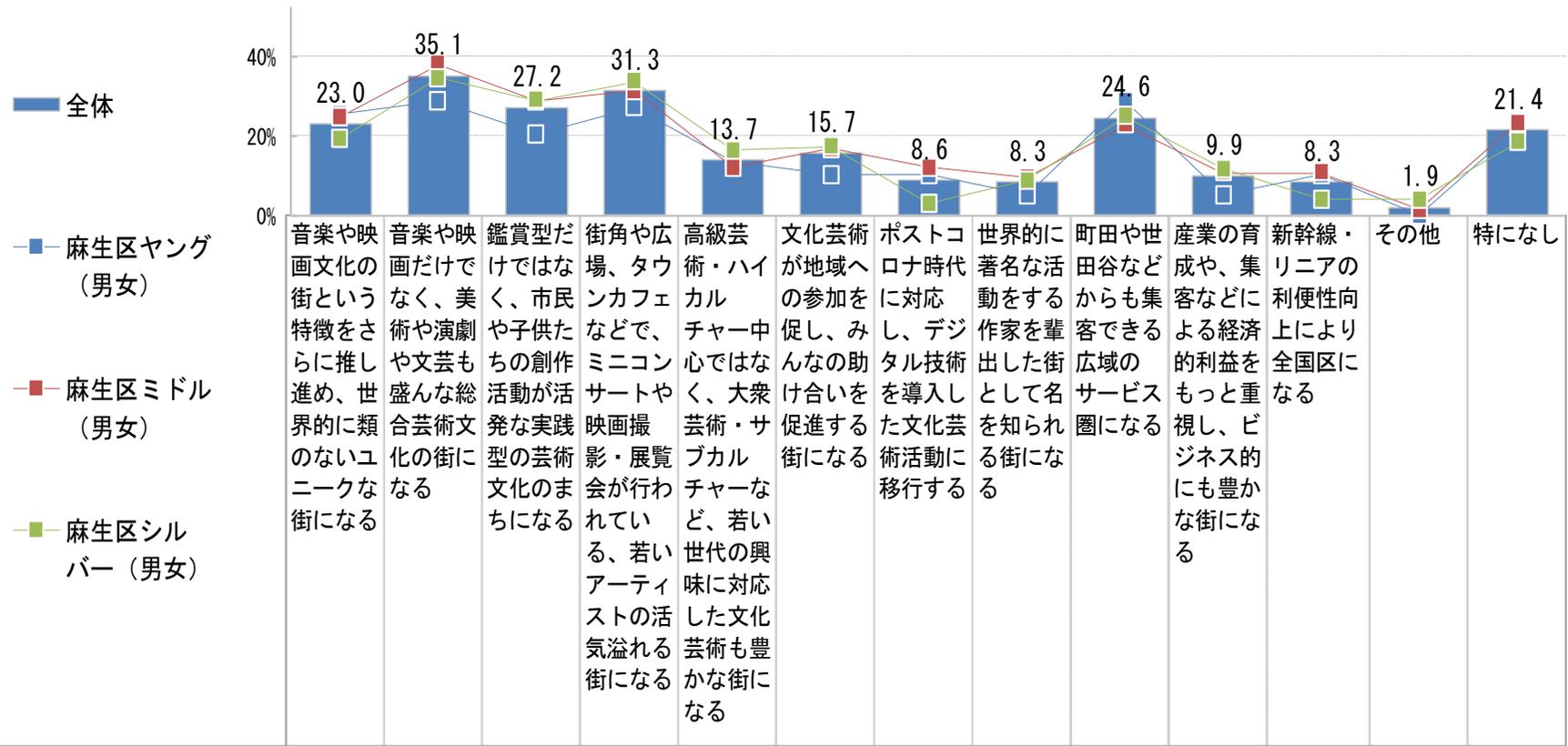
「大いに感じている」「感じている」を合計すると、30年以上居住している層の評価が最も高い（70.4%）が、他の層との違いはそれほど大きくはない。「20～29年」の層では、「大いに感じている」が、その前後の年代よりかなり低くなっている。



【新百合ヶ丘の芸術文化の今後の方向】

◆新百合ヶ丘の芸術文化の目指すべき方向（麻生区世代別、居住年数別）

麻生区のミドル層とシルバー層では「総合芸術文化の街になる」「若いアーティストの活気溢れる街になる」「実践型の芸術文化のまちになる」の順で数値が高くなっているが、ヤング層では「総合芸術文化の街になる」と「町田や世田谷などからも集客できる広域のサービス圏になる」が28.8%と最も高く、次が「若いアーティストの活気溢れる街になる」27.1%である。



麻生区全体	(313)	23.0	35.1	27.2	31.3	13.7	15.7	8.6	8.3	24.6	9.9	8.3	1.9	21.4
麻生区ヤング (男女)	(59)	25.4	28.8	20.3	27.1	13.6	10.2	10.2	5.1	28.8	5.1	10.2	0.0	22.0
麻生区ミドル (男女)	(150)	24.7	38.0	28.7	31.3	12.0	16.7	12.0	9.3	22.7	10.7	10.7	1.3	23.3
麻生区シルバー (男女)	(104)	19.2	34.6	28.8	33.7	16.3	17.3	2.9	8.7	25.0	11.5	3.8	3.8	18.3

【考察と提言】

I. 考察－定性調査と定量調査の比較から見えてくるもの

◆文化芸術のまちづくりの効果

- 「芸術のまちづくり構想」の認知度は「よく知っている」2.9%、「大体は知っている」21.4%、「聞いたことはある」40.9%。構想への認知が愛着や誇りを醸成し、シビックプライドを涵養していることが推測される。

◆シビックプライドの涵養

- シビックプライドは、主体的な地域作りへの参加を促す。文化芸術イベントへの参加がそれを促している可能性は高い。
- 新百合ヶ丘の芸術文化活動を「非常に評価している」「評価している」の合計が麻生区54.6%。「芸術のまちづくり」の新百合ヶ丘住人への効果は十分に見られ、概ね住民から評価され、機能していると言っている。鑑賞機会と実践実演の機会を増やし、住人たちのまちへの愛着と誇りを高めている。

◆ヤング層の参加について

- 「新百合ヶ丘の芸術文化団体の認知度」で、次世代を担うヤング層の地域の芸術文化活動の参加において、極めて深刻な事態が起こっていることが分かる。

【考察と提言】

I. 考察－定性調査と定量調査の比較から見えてくるもの

◆社会教育、主体的・民主主義的な精神の涵養

- 「子供たちへの教育の機会を提供してくれるから」が、新百合ヶ丘における芸術文化活動を評価する理由の3位（31.3%）であり、「教育」装置としての芸術文化活動には一定の評価がある。「社会教育」も、「評価する理由」に、「地域の社会課題に気付き解決していくきっかけになったから」という回答がミドル層に4.6%あり、高い割合ではないが、機能していると推測される。

◆自然と科学

- 「イギリス貴族」的な、郊外の環境の価値は十分に住民にも伝わっているのではないかと推測され、一方科学や文明への懐疑も残っているように思われる。ウィリアム・モリス的な「自然」を大事にする芸術観もある程度伝わっているだろう。

◆地域アイデンティティ

- 「川崎」アイデンティティの薄さを裏付ける結果になった。
- 「川崎＝公害」というイメージの払拭が「環境芸術」などの狙いにあったが、それは達成されただろう。

◆創造都市、創造産業の発展

- クリエイティブ・シティにしようという意図は、あまり住人たちに意識されていないようである。総じて、ビジネスや産業などの実益を芸術文化に求めている傾向も見られる。

【考察と提言】

I. 考察－定性調査と定量調査の比較から見えてくるもの

◆伝統の継承、伝統と未来

- 新旧住人共通のアイデンティティを作り上げる課題は概ね達成された。
- 2007年の「第二のまちびらき」以降には分断も見られる。
- 土着の伝統を重視するイベント、民俗学的な関心などを示す行事も、相対的に目立たなくなってきた。 新しい住人と、伝統を結び付けるさらなるチャレンジが必要な時期に来ているのではないだろうか。

◆社会的包摂

- 「芸術文化活動の評価」で、「市民として社会に参加していく態度が養われるから」「地域の社会課題に気づき解決していくきっかけになったから」が、7%、4.7%であることから、あまり社会的包摂は意識されていないようである。
- 「新百合ヶ丘の芸術文化活動の今後の方向」として、「助け合いを促進するまちになる」の15.7%（居住年数が30年以上で34.1%）は、社会的包摂を志向する芸術文化への希望だと読みとることもできる。一般的に芸術文化におけるそのような機能の側面が周知とは言えない中で、相対的に高いニーズがあると考えることができる。

【考察と提言】

Ⅱ. 提言

- イギリス郊外のような良質な環境は維持するべき。
- 住民の自主性・文化度は地域の魅力（活力、教育効果）になり、比較的居住歴の浅い層にもアピールしているので、受け継ぐべき。
- その上で、既存の芸術文化はヤング層にアピールしにくくなっており、新しい挑戦をせねばならない時期に来ている。



◆ヤング層へのアピール

◆最先端の芸術施設の導入

◆新しいアイデンティティの創造

◆ヤング層にアピールするために

- 様々な芸術文化活動を活発に繰り広げ、交流も増やしネットワーク化していくべきだろうし、電光掲示板などを設置し駅前などの目に触れやすい場所で情報提供を積極的に行っていくべき。
- サブカルチャー、ネットカルチャーなども、工夫して慎重に取り入れていくべきだろう。
- ネット空間とリアル空間を同時に生きている現在のヤング層のリアリティに訴えかけつつ、現代文化の問題性を克服するためにこそ、伝統文化や、地域が培ってきた文化を活かし、両者を高次で融合させる新しい文化を創造していく方向性が望ましいのではないか。

◆最先端の芸術施設の導入

- 最先端の、美術館を備えた総合的な芸術施設を駅の近くに作ることが必要である。
- 人々の繋がりや交流を生み出す仕組みを取り入れた図書館や美術館などを参考に、サークル活動と住民による文化芸術活動と、プロの活動と教育施設が相互に影響を与え合う先進的な施設を駅の近くの利便性が高い場所に作るべき。
- そして、その結果として「つながり」が増し、社会課題の解決や社会包摂が増大していく方向を志向するべきだろう
- 未来志向のデジタルミュージアム、特撮ミュージアムも、実現可能性が高い。川崎市民ミュージアムの収蔵品を借りる方向性もある。

◆新しいアイデンティティの創造

- まちづくりの新たな段階に応じた新しい地域アイデンティティの創造も必要なのではないか？ たとえば 「自然」と「環境」を重視し、伝統と未来、自然と科学を調和させながら創造的にまちづくりを行ってきた上品で文化的な地域 など。
- 「伝統と前衛」「自然と科学」の調和と創造という、これまでこのまちが取り組み続けてきた課題を、未来に向けて一步前進させる必要がある だろう。岡本太郎、今村昌平のように、民俗学的な興味を持っていた作家たちがその参照点になる。
- SDGsや環境危機、資本主義の限界などは、全世界共通の課題であり、「環境」を重視してきたこれまでの街の取り組みを延長し接続させるべき である。
- しかし、単純にテクノロジーを捨てることは、若い世代には訴求力を持たないし、現実的でもない だろう。AIなどによる第四次産業革命による、産業構造の大転換も予測されている。そうであるなら、この街が育んできた「創造性」は、環境危機や戦争、第四次産業革命など、未知の未来に柔軟に対応し生きていくための能力として読み替える方がいい のではないか。
- そして、「デジタル田園都市」やスマートシティのように、最先端の洗練されたテクノロジーや便利さと、自然環境や生命との調和を実現し、幸福で持続可能な生活ができる地域 だとPRするのが良いのではないか。

以 上